

海洋深層水利用による養液栽培の高温障害回避技術の開発

1)ホウレンソウ及びサラダナの周年安定出荷技術確立

②サラダナ

(3) 適正栽植密度の検討

上原弘樹・兼島盛吉・内間邦和*・加納知嘉司*

1.目的

パミスサンド耕養液栽培において栽植密度の違いがサラダナの生育にあたる影響について調査し、適正栽植密度の検討資料とする。

2.材料と方法

- 1) 供試品種：バイオサラダナ
- 2) 栽培方式：パミスサンド耕養液栽培方式（琉球産経(株)システムを使用）
- 3) 規模：1区 $3.1\text{m}^2 < 0.39\text{m}^2$ （長さ115cm×幅34cm×深さ9cm）×8箱>
- 4) 播種日、定植日及び収穫日
播種 5月24日、定植 6月5日、収穫 7月3日（栽培日数40日）
- 5) 処理：栽植密度を以下の4区とした。
① 43.6株/ m^2 区（17株/箱）、②53.8株/ m^2 区（21株/箱）、③76.9株/ m^2 区（30株/箱）、④ 92.3株/ m^2 区（36株/箱）
- 6) 調査：1株収量、単位面積あたり収量、品質

3.結果の概要

- 1) 栽植密度と単位面積当り収量に高い正の相関（ $R=0.9$ ）がみとめられ、栽植密度と1株収量に高い負の相関（ $R=-0.94$ ）がみとめられた。
- 2) 播種後40日において出荷基準重量80gに達した区は、43.6株/ m^2 区（17株/箱）と53.8株/ m^2 区（21株/箱）のみで76.9株/ m^2 区（30株/箱）と92.3株/ m^2 区（36株/箱）では葉揃いの悪い、小球が多発した。
- 3) 以上のことから、栽植密度の最も低い43.6株/ m^2 区（17株/箱）では、1株収量が最大となる反面、単位面積あたり収量はやや低いため、品質および商品化収量の最も多い53.8株/ m^2 （21株/箱）が適正栽植密度と考えられた。

*嘱託職員